

## ごみ箱はどこにいても探すもの ～オリンピックのごみ箱事情～

WWF ジャパン 自然保護室森林グループ みなみ 南 あきこ 明紀子

### ◆ところ変わればごみ箱変わる

引っ越しをするとごみの分別が全く違うので困ったという話をよく耳にします。ただ、分別が違うのは自治体の間だけではないはずです。会社でも学校でも、駅でも、もしかしたらすべて分別方法が違うかもしれません。そしてそれは旅先のホテルや街なかでも同じで、私たちはごみ箱に書いてある文字や絵を見ながら自分の経験を重ねてどう分別するかを判断しているのだと思います。

例えば、東京のJRのごみ箱は「新聞・雑誌」「カン・ビン・ペットボトル」「その他」という分別をよく見かけます。また高速道路のパーキングエリアにあるごみ箱に驚かれたことはあるでしょうか（写真1）。「びん」「缶」「ペッ



写真1 パーキングエリアのごみ箱 中村恵子氏提供

トボトル」「キャップ」「飲み残し」「プラスチック・ビニール」「新聞・雑誌」

「不燃物・機械類」「紙類」「その他」と大きなごみ箱がずらっと並んでいます。本当に利用者が指示どおり分別しているのか気になるところです。以前ドイツを旅行した時、ドイツ鉄道のごみ箱は「PAPER」「GLASS」「PACKAGING」「WASTE」と4カ国語で書かれていたものの、容器包装は紙もプラスチックも含まれるのか、缶はどうするのか迷ったことがありました（写真2）。一方、



写真2 ドイツ鉄道のごみ箱 小寺正明氏提供

出張で訪れたインドネシアの田舎町では、道端に捨てられているごみも多く、夕方になるとごみを庭で燃やす煙があちこちから立ち昇ります。

そう考えると、ごみの分別とは社会システムに伴う習慣であって、暮らしている場所によって千差万別です。分別をするのが当然の社会で暮らす人々は違う国に行っても分別するかもしれませんが、そもそもごみ箱に捨てるという習慣がない国もあるかもしれません。

## ◆オリンピックの会場で

### ペットボトルを飲み干したら？

では、オリンピック会場のごみ箱・分別はどんなものなのでしょうか。オリンピックには、世界中から多くの人々が訪れます。分別方法は通常、どう処理したいかで決まりますが、国際イベントの場合は分別方法がきちんと伝わるか、という点も大きな課題となるはず。5種類、6種類に分別することに慣れている日本人と、ごみ・資源・草木の3分別が当たり前になっているアメリカ人とは、分別の手間が全く異なります。日本では細かく分別した方が効率良く処理ができますが、意図したとおりに分別してもらえなければ結局処理の手間が増えてしまいます。

ロンドン大会では、ごみ箱を3色に分けて分別のしやすさを重視したと聞きます。会場にあったすべてのごみ箱は「生ごみ（赤）」「紙・ペットボトルなどリサイクルできる物（緑）」「リサイクルできない物（黒）」となっていました（写真3）。また、販売した容器にも、ごみ箱と同じ色のマークを付けて分別方法をわかりやすくしたそうです。

日本のおもてなしは、ロンドンのよう

になるべく分別を少なくしわかりやすさを目指すべきでしょうか。それとも大きなイベントで最近よく見るようになりましたが、分別ステーションを設置し、分別指導員を配置することで分別の徹底に力を入れるべきでしょうか。

オリンピックは単なるスポーツイベントではなく、開催国はその後に残るレガシー（未来への社会的遺産）まで考え計画する、一大プロジェクトでもあるといえます。1964年の東京で開催されたオリンピックでは、当時、東京都はいつでも好きなきにごみが出せるよう、街中に常時ごみ箱を置いていましたが、オリンピック開催に向けてポリバケツによる定時回収を始めました。北京五輪の際にも、国家を挙げてマナー教育に力を入れたという報道がありました。

2020年の東京大会に向けても、すでに再開発に伴うニュースが話題になっていますが、レガシーは建物などハード面だけではなく、公共空間のごみ箱など人々の意識を変えるソフト面にこそ残されるべきだと思います。東京は、どんな分別を求め、どういったごみ箱を準備するのか。その検討が始まったばかりですが、今からどうなるのか楽しみです。



写真3 ロンドン大会のごみ箱（右写真：右から赤・黒・緑）  
Images courtesy BioCycle magazine, www.BioCycle.net